

顔が紡ぎ出す物語

坂田三允（長野県看護大学）

7月3日の『東京スポーツ』新聞の第1面に「整形手術失敗」という大きな文字が踊っていた。「ん？」と気になって覗いてみて、私はのけぞった。こともあるに、あのミッキー・ロークが整形手術を重ねたというのだ。見るも無残な（と思うのは他人である私であって、当人は満足しているのかもしれないのだが）現在の顔が、かつての美しい顔と同じ紙面に載っている。まるで別人だ。「エンゼルハート」のときの憂いを帯びた顔、「ナインハーフ」のときのあの端正な顔は、いったいどこにいったしまったのだ。なぜ？ どうして？ 彼は整形手術など…。わからない。顔、顔とは何？ 人間にとって顔とは？

そこで『顔面考』である。いくつかの新聞や週刊誌で取り上げられたこの書の著者は精神科医。顔面そのものというよりは、顔の下に隠された、あるいは顔の内て揺れ動く心のありようについて多くのことが語られているのはいうまでもないが、この書にはまた、おびただしい数の「顔」の絵や写真が収められている。「わたしにとって、顔は不可解というよりも『いかがわしい』ものとして映る」という著者が「『いかがわしさ』『グロテスク』『珍奇さ』といった感覚を重視しつつ、顔にまつわる考察を進め」たものにふさわしく、ソディテストに用いる精神障害者の顔写真、電極を被験者の顔にあてて作り出した表情の写真、人面犬の絵などなど、それだけでも一見の価値があるかもしれない。

さらに、観相術をはじめとする人間の顔への思い入れを示す挿話の数々は、思わずくすくす笑ってしまうものあり、うーんと考えこんでしまうものありで、いずれもとてもおもしろい。「精

神と顔、精神と表情のあいだにはかなり密接な関係があると我々は漠然と信じている」からこそ、顔にまつわるさまざまな物語が紡ぎ出されたりもするのだろう。

人間は誰でも顔を持っている。人間にとって顔は重要だ。人間を識別する最も大きな手掛かりであろう。殺人者は殺した人が誰であるかわからないように顔だけをつぶしたりもするし、逃亡者は顔を変えたがる。初めて出会った人についての印象も、特別のことがない限り、顔、もしくは顔が作り出す表情で形成される。“やっぱり、美人は得よねえ”という話になることだって多い。だから、鼻を高くして、二重瞼にしたりする。

しかし、「『わたし』の顔について他者が抱くであろう感想は、その他者の態度や仕種から推察する以外には窺い知ることはできない」し、「鏡へ向き合ってみても…中略…自身を客観的に眺めることなどではできない」。だから、「自分の顔は、自分に対する不確実感と醜さへの疑惑が生じたときに、はじめて『醜い顔』へと変貌を遂げ」、醜形恐怖症なる病に冒されることも起こりうる。

「顔を変えるということは、自分がまったく新しい物語の中に生きようになるということ」ではあるが、「顔を美しくしたとしても、それが運命の好転を意味するとは限らない」ことも事実だろう。ミッキー・ロークは、いま幸せなのだろうか。「顔は往々にして他人に誤解を生じさせ、現実とは異なった物語を紡ぎ出そうとする。そのうえ顔は、その持ち主を裏切ることすらある」のだ。



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院（精神科部長）を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。